

# 宗教に生きた17世紀の女性たち

—第五王国派とラバディズム

小 柳 康 子

## 1. 17世紀の宗教的背景

1640年代の始めから50年代終わりまでの20年のイギリスは、宗教の対立による王と議会（ピューリタン）との対立から内乱へ、そして王が処刑されて共和政の政治が行われ、これが1660年に終わって再び王政となるという激しい動乱の時代であった。ヘンリ8世の宗教改革によってイギリスはローマ教会のカトリックから離れてプロテスタントの国になり、イギリス国教会が国の宗教となったが、この国教会の主教を中心とした教会制度や教義に対してピューリタンが一層の厳しい改革を要求するようになっていく。そして王とその周りの王党派と呼ばれるグループとピューリタンのグループが対立し、ついには内乱となり、ピューリタンが勝利してチャールズ1世が処刑された。

このような内乱期といわれた時代に活発に活動したピューリタンのありようは一様ではない。議会軍を率いて王党派を破ったオリヴァー・クロムウェルは独立派に属していたが、王を処刑した後には、この独立派に反対して、より過激な考えを主張するグループも生まれてくる。ピューリタンたちは、教会の権威ではなく聖書に書かれてあることを信ずるという考えを持っていたが、これに従わない、より過激な反律法主義という考えを持つ者も生まれてきた。彼らの中には、神によって自己に直接顕現された内なる光だけを信じ、聖書の言葉さえも聞き入れようとしないものも出てくる。人間社会にある取り決めや道徳は外部から押し付けられたものだとして、あらゆる権威や道徳を廃棄しようとしたのである。

このように内乱期には、クエイカー、ディガーズ、ランターズなど、神の

直接の啓示という神秘主義的体験を持つグループが多く生まれ、彼らは聖書主義ではなく、霊による直接的な働きかけを重要視するスピリチュアリズムの立場に立っていた。その中でも代表的なクエイカーは、自分たちを「真理の子」、「光の子」と称し、信仰における一切の制度的、形式的なものを否定して、形にとらわれず、霊的存在としての人間の平等が重要だと考えた人々であった。啓示を受けた時に体が「震える」(quake) ところにクエイカーという名前の由来がある。

これらのグループの信者たちは、人間が神の前では平等であるという考えを徹底させて男女の区別をつけなかったため、女性たちの宗教的活動も顕著になり、女性たちが人前で説教をしたり、ものを書いたりすることも珍しいことではなかった。1640年代から50年代にかけて出版された女性のテキストは270以上にのぼり、そのうち40年代には予言書、50年代にはクエイカー女性のもものがそれぞれ50以上出されたといわれている。このような宗教的活動の先頭に立った女性たちは、議会に十分の一税廃止の請願書を提出したり、自分たちの教義の擁護や終末論的預言を残している。

## 2. イギリスにおける千年王国思想と第五王国論派の女性たち

自らの生きる時代を、旧約聖書の「ダニエル書」や新約聖書の「ヨハネの黙示録」に記されている終末の時代であるとする思想はキリスト教そのものの中に内在していた。この思想が、不信仰と教会の墮落、さらには苦難に対する怒りと結びついた時、世界の崩壊とその後続く神の国の到来を比喩的にではなく文字通りに実現させようとする「千年王国論」として中世以来幾度か繰り返されてきた。17世紀のイギリスが経験した内戦と共和制の時代もこの歴史的あらわれのひとつといえる。「ダニエル書」や「ヨハネの黙示録」を典拠にして、反キリストが打ち倒され、近い将来にキリストが再臨し、地上で「キリストの王国」が実現されるという千年王国論は、中世には異端的な考えとみなされていた。しかしこの思想は17世紀のイギリスにおいて有力な教えとして復活し、ラテン語で書かれた書物が革命初期に英訳され、多くの読者を獲得していった。ピューリタン革命を導き、その展開に影響を与えた黙示的終末思想であるこの千年王国論は、体制派ピューリタンの側にも、より過激な集団の側にも見られたが、特にこの考えを強く打ち出して活動したのが、「第五王国派」といわれるグループであった。

第五王国派という名前は、「ダニエル書」第2章第44節のバビロンの王ネブカドネツァル（ネブカデネザル）王の夢に現われる巨大な像の象徴である四つの帝国の滅亡後に到来する「永遠に滅びることなく、…すべての国を打ち滅ぼ（す）」神の国の記述から取られている。第五王国派は、バビロニア、ペルシア、ギリシア、ローマという四つの王国が歴史上興亡し、最終的にキリストの王国を意味する第五王国が地上に出現すると考える千年王国論者のグループであった。彼らはチャールズ1世が処刑された1649年頃に台頭し、短い間にロンドンやウェールズに勢力を拡大して、1653年の指名議会には多くの議員を送り出してクロムウェルと手を結び、権力の座に接近したが、議会内外で法制度や教会制度における徹底的な改革要求と激しい政府批判を展開したため、クロムウェルを中心とする保守的多数派が53年12月に議会解散を強行した後は、公然たる反体制勢力となっていく。彼らの中には、クロムウェルを、「ダニエル書」7章に登場する聖徒を悩ます狂暴な獣の「小さな角」になぞらえる者もあった。

この第五王国派のメンバーとして活動した女性にメアリ・ケアリ（Mary Cary）とアナ・トラプネル（Anna Trapnel）がいる。内乱期にはクエイカーの女性たちも様々な預言を書いているが、政治的事件をこの世の終わりに関する聖書の記述の実現であると解釈したメアリ・ケアリとアナ・トラプネルの預言は、宗教的熱狂と政治権力が結びついていたこの時期のイギリス社会を新たな角度から照らしだすものとしてとりわけ重要性を持つといえる。

メアリ・ケアリは、チャールズ1世の失政から処刑に至る経過を、「ダニエル書」と「ヨハネの黙示録」に描かれている反キリストの短期的支配とその後の千年王国の実現であると信じ、これを伝える役割を自らに課した女性である。彼女はさらに、十分の一税の廃止や大学改革などの社会改革プログラムにも熱意を示している。1645年に宗教的・政治的発言を開始したケアリの1648年のテキスト「証人の復活とローマからのイングランドの没落」では、チャールズ1世と議会との内戦が「ヨハネの黙示録」第11章第1節から13節までの記述と重ね合わされ、現実の出来事が聖書の預言の再現として示されている。

また1651年に出版された「小さな角の運命と没落」では、「ダニエル書」第7章におけるダニエルの幻、すなわち「四頭の獣の幻」に関する記述に依拠して、チャールズ処刑の正統性が展開されている。海から現われる四頭の獣の中で最後に現われる十の角と小さな角を持つ強大な獣の支配と敗北が、

「地上に興る第四の国」であるイギリスとその支配者チャールズ1世と重ね合わされ、時代の政治的・宗教的現状が「証人の復活」と同じ黙示的終末論の枠組みによって描かれているのである。

メアリ・ケアリより少し遅れて第五王国派の預言者として活動した女性がアナ・トラプネルである。ロンドンの船大工の娘として生まれたトラプネルは、十代の時から国政に関わるビジョンを見、それを半覚醒状態で語ることを繰り返した女性であった。1654年に出版された『石の叫び』には、ウェールズ出身のヴァヴァサ・パウエルの審問がホワイトホールで行われていた時、11日間の恍惚状態に陥ったトラプネルが絶食に近い状態で表現した祈りと歌がまとめられている。また同じ年の1654年に出されたコーンウォールでの伝道の様子を伝える『アナ・トラプネルの記録と抗弁』には、反政府活動と魔女の嫌疑をかけられて審問されたトラプネルが、判事たちの前で自らの無罪を鮮やかに弁じる様子が描かれている。

題名を「ハバクク書」第3章第11節の「まことに石は石垣から叫び/梁は建物からそれに答えている」という個所からとった『石の叫び』は、『ホワイトホールで語られたこと、為政者たち、軍隊、教会、聖職者、大学、国家に関する陳述』という副題から知られるように、神のメッセージの仲介者となった若い女性が国政に関わるビジョンを目撃し、それを伝えることによって否応なく政治に介入してゆくプロセスの記録である。また過去の様々な幻視体験をも述べるこの『石の叫び』は、『アナ・トラプネルの記録と抗弁』と同様に、預言者トラプネルの自伝として読むことのできる興味深いテキストともなっている。

内乱期に女性の宗教的活動が多くなったのは、検閲制度が廃止されたという事実によるだけではなかった。実際の出来事を聖書の記述の実現と解釈し、それに合わせて現実を変革しようとする黙示的終末思想そのものが、女性の政治的・宗教的活動を可能にしたといえるからである。この世の崩壊、キリスト支配の千年続く王国、最終的な神の国の到来を、定かならぬ将来に起きる出来事としてではなく、切迫した期待をこめて見て取る意識がそこにはあった。

キリストが支配する千年王国の到来を信じた第五王国派は、王制復古直後の1661年1月、トマス・ヴェナーに率いられて武装蜂起を企てたが失敗し、歴史の舞台から姿を消した。メアリ・ケアリやアナ・トラプネルがこの後どのように生きたのか知られていない。しかし女性も男性と同じく神の前で平

等であり、また自分の信念を書き記すことが可能だということを教えてくれたという意味で、彼女たちの活動は17世紀の女性のテキストを研究するとき大きな意味を持っているといえるのである。

### 3. 大陸における2人の女性ラバディスト

17世紀のイギリスは宗教的対立のただ中であつたが、これとほとんど時期を同じくして大陸においても、ドイツの人口を激減させたヨーロッパ規模のカトリックとプロテスタントによる30年戦争があつた。あらゆる外的権威を拒否し魂のありようを問い続けた人々がイギリスに現れたように、大陸においても、30年戦争という新旧宗教による未曾有の戦乱を背景にして、個人の魂と霊を問題とする新しい動きが生まれてくる。この流れは、フランス、スペイン、イタリアなどのカトリック国はもとより、オランダやドイツなどプロテスタント諸国においても顕著で、カトリック内部の改革運動は静寂主義あるいはキエティズム、プロテスタント内部のものは敬虔主義あるいはピエティズムといわれている。嵐の吹きすさぶ外的世界から遠ざかり、ひたすら人間の内部に目を向けるキエティズムは古代・中世以来の神秘主義と直接的に結びつく動きであつたが、これと同じように個人の魂の救済を問題にした敬虔主義は、既存の改革教会の権威を攻撃する、新たに再生した信徒からなる小組織をつくり上げての運動という側面も持っていた。

ボルドーのイエズス会修道院の司祭から改革派教会に転向し、スイスやオランダ各地で、この世の放棄、財の共有、聖霊による照明を説いてキリストの王国到来を説いたジャン・ド・ラバディの教義と彼の周りに集まった少数の信者グループの運動であつた「ラバディズム」もこの敬虔主義のひとつである。イギリスのクエイカーや第五王国派の女性たちとは異なり、敬虔主義に惹かれていった女性たちには、経済的にも文化的にも比較的恵まれた層の出身者が多かつた。中でもラバディズムは、オランダのアナ・マリア・ファン・シュールマン (Anna Maria van Schurman) とドイツのマリア・シビラ・メーリアン (Maria Sibylla Merian) という才能豊かな2人の女性たちが身を投じ、神への祈りの生活を通して自らの生を問い直した場であつたという意味で、17世紀の女性のテキストを研究するさい重要性を持つ。

アナ・マリア・ファン・シュールマンは1607年ドイツのケルンで生まれた。兄が3人いたが、三男は幼くして亡くなっている。父方の祖父はカルヴ

イニズムの土地であったベルギーのアントワープ出身であったが、その後アントワープがカトリック化されたときドイツに逃れて来た一族であった。シュールマンの誕生後まもなく、一家はカトリック色を強めていくケルンからユトレヒトに移り住み、その地でシュールマンは生涯の大部分を過ごした。

シュールマンは当時の女性の常として正式な学校教育を受けることはできなかったが、父が教育熱心だったため、兄たちの家庭教師について勉強をすることができた。彼女は父の励ましもあって、語学、詩、絵画、刺繍、切り紙細工、音楽など多方面において幼い時から非凡な才能を開花させ、成人してからも語学をマスターし、聖書や古典を読み解き、女性の学問を擁護する書を発表していった。シュールマンはまた多くの哲学者や聖職者や女性たちと文通し、その学問と知性によって、「ユトレヒトの星」、「自然の驚異」、「10番目のミューズ」などと称された。また自画像や友人・知人の肖像画、手の込んだ見事な刺繍や切り紙細工などを多く残したシュールマンは、ユトレヒトの画家ギルドの名誉会員にも選ばれている。

シュールマンの知的活動の最盛期は1630年代から1640年代にかけてである。1630年代にとりわけ親交の深かったライデンの神学者でウイリアム2世のチューターでもあったアンドレ・リヴェットは、シュールマンが優れた頭脳を持つことを見抜き知的探求を励まし続けた。しかし彼はシュールマンのような特別なケースを除けば女性には学問は不要だと考えていたため、これに賛成できなかったシュールマンは、神の前に男性と平等に造られた女性の知的能力は男性と変わらないこと、そのため学問はすべての女性にふさわしいとする「女性の学問」を1641年にラテン語で出版した。これは1659年に英語に翻訳されている。

リヴェットと並ぶもう一人のメンターは、オランダにおけるデカルトの論敵で神学者・哲学者のギスベルトゥス・ヴォエチウスであった。ヴォエチウスは自分の勤めるユトレヒト大学の特別に仕切られた小部屋でシュールマンが語学の講義を聞くことができるように取り計らってくれたため、彼女はオランダの大学における最初の女子学生として、ギリシア語、ヘブライ語、エチオピア語、カルデア語、シリア語を学び、ギリシア語とヘブライ語を書くことができるまでになった。シュールマンの語学の才能は、イギリスのバトスーア・メイキンとギリシア語で手紙を交わしていることから証明されている。シュールマンと同じく父から教育を受け、優れた語学教師であったメイキンは、『古の淑女教育復活論』という女子教育論を出して新しい語学教

育カリキュラムで女子教育にあたった女性であった。ラテン語で書かれた「女性の学問」を読んで感銘を受けたメイキンの手紙への返答の中でシュールマンは、内乱の騒動の中で家事と学問と教育に奮闘するメイキンを褒め称えている。

このようにシュールマンは、1630年代から40年にかけて才女としての名声をほしいままにしたが、その後表舞台から姿を消していく。1637年に母が亡くなった後、家事と2人の老伯母の介護をしなければならなくなったという家庭の事情が、自分自身のそれまでの生き方を再考させたからである。シュールマンは、聖書や古典を原書で読み、一流の学者や聖職者と神学や哲学について論争し、手仕事を通して素晴らしい芸術を作り出して有名になることが、果たして幸福につながるものかどうかを、家事と介護に明け暮れる中で問いつづけた。それは、人生の残り時間を、これまでの自分ではなく新たな自分へと変容するためにどのように生きるのが最もふさわしいのかを考え続けたということであった。

シュールマンが自分の人生を振り返り始めた時期は、自らを聖霊により召命された預言者とみなして活動していたラバディがその過激な言動によって改革派教会から追放されて、少数の信徒と共にヨーロッパ各地を放浪する旅に出た時と重なっている。数年前からラバディスト共同体に身を投じていた次兄のヨハン・ゴドシャルクから苦難の道を歩み始めたラバディのことを知ったシュールマンは、友人たちのアドバイスや非難にも関わらず、彼と行動を共にすることを決意する。彼女はそれまでの生活のすべてを投げ打って、ひたすら神の前に祈るという生活を選択したのである。この時シュールマンは、人生行路を変更するには遅すぎると言ってもいい60才になっていた。

ラバディに率いられたシュールマンと少数の信徒たちは、知り合いを頼りながらヨーロッパ各地を転々とする生活が続け、1672年から2年間は、30年戦争でプロテスタント連合の陣頭に立ったボヘミア王フリードリッヒ5世の娘エリザベトが院長を勤めるヘルフォルト尼僧院に滞在もしている。若き日にデカルトと往復書簡を交わした才女エリザベトはシュールマンの文通相手でもあったが、この時にはすでに過去の哲学的思索から遠ざかり神秘主義的敬虔の中に晩年の日々を過ごしていた。シュールマンはラバディが1674年に亡くなった後も彼の後継者ピエール・イヴォンの率いるコミュニティにとどまり続け、1678年にフリースラントで70才の生涯を閉じた。

シュールマンの書き残したものは、詩、女性の学問擁護論、手紙、自伝な

ど多岐にわたる。最も有名なものはいうまでもなく「女性の学問」であるが、ラバディスト共同体に加わった後の1673年に書かれた『エウクレーリア あるいはより良き部分の選択』もまた、激動する17世紀という時代を生きた稀有な女性の人生の選択がいかなるものであったのかを示す興味深い自伝となっている。

シュールマンより少し遅れてラバディズムに転向したマリア・シビラ・メーリアンは、30年戦争終結の1年前の1647年にドイツのフランクフルトに生まれた。版画家・画家で、手広く出版工房も営んでいた父の才能を受け継いだメーリアンは、幼い時から昆虫の生態に興味を持ち、家の周りで昆虫を採集して観察しそれらをスケッチするといういささか風変わりな少女であった。父は3才の時に亡くなったが、母の再婚相手も工房を持つ画家だったため、義父や工房の職人から自宅で絵や版画の基礎を教わることができた。この基礎教育は後に画集を出版するとき非常に役立った。

メーリアンは18才で同業者と結婚してニュルンベルグに移り住み、花や毛虫の変態をテーマにした画集を出版して成功を収め有名になったが、酒飲みで怠け癖のやまない夫との折り合いは悪かった。そして彼女は1685年に、年老いた母と娘2人を連れてオランダ西フリースラントにあるラバディストのコミュニティの門をくぐったのである。ラバディズムでは、信者同士の結婚しか認めていなかったため、これは妻の側からの離婚宣言にも等しい行為であった。

この当時、ラバディストたちの拠点はヨーロッパ各地に幾つかあったが、メーリアンたちが住んだフリースラントのウィーウェルトにあったコミュニティは、熱心な信者コルネリウス・ファン・ソメルスダイクの居城であった。ソメルスダイクは南アメリカにあるスリナムの総督として現地に赴任して不在だったため、自分の居城を信者に開放していたのである。ここにはメーリアンの異母兄カスパルが数年前からすでにラバディストとしての生活を送っていた。この地で7年前に亡くなったシュールマンは、哲学の研究や刺繍の製作、絵画などの作業をすべて絶ち、神との対話と自伝に没頭するという徹底したラバディストの生を選択して生きたが、メーリアンは違っていた。彼女は以前と同じように、昆虫を採集しては観察しそれらをスケッチに残しただけではなく、版画や昆虫標本を販売して、自給自足経済から成り立つ共同体に経済的寄与もしたからである。



メーリアンがフリースラントに来た時、ここで生涯を過ごすつもりだったかどうかは不明である。しかしたとえこの閉ざされた場所で俗世間を絶って生きようとする意思があったとしても、ソメルスダイクのスリナムでの殺害や、厳しすぎる規律を嫌った信者たちの離反によって内部崩壊を起こしはじめていた共同体に長くとどまることはできなかつたであろう。メーリアンは5年間の生活の後、1691年にコミュニティを離れアムステルダムに移り住んだ。

アムステルダムには知人も多く、生活は順調に推移したが、メーリアンはさらに新たな世界へと足を踏みだしていく。52才になった1699年に、次女を連れてスリナムへと旅だったのである。南アメリカの昆虫を採集し観察しスケッチをすること、そしてそれらをもとに多くの人を驚かすような画集を作ることが目的であった。50才を過ぎた女性とは思われない稀有な意欲と体力に恵まれていたメーリアンは現地に溶け込むのも早く、ドイツやオランダで行ったと同じフィールド・ワークに精力的に従事した。3年の滞在計画は1年早まったが、帰国する彼女の荷物には熱帯の昆虫や小動物の標本と膨大なスケッチが詰まっていた。そしてこれらのスケッチを基に周到な準備を重ねた後、1705年に彩色銅版画集『スリナム産昆虫の変態』を出版したのである。ここにはそれまで誰も目にしたことのない、荒々しい熱帯の自然の中に棲息する植物と昆虫や小動物が、大胆な構図と鮮やかな色彩によって見事に描き出されていた。

#### 4. まとめ

17世紀は、イギリスを始めとするヨーロッパ社会において、カトリックとプロテスタントの宗教的対立が抜き差しならない局面に達した激動の時代であった。そして新旧どちらの陣営にも、教会や聖職者などの外的権威にすぎたのではなく、心の深みに降り立ち、そこに聞こえる神の声に従おうとする動きが顕著になった。社会の周縁に位置するこれら宗教共同体はきわめて小さな存在にすぎなかつたが、そこでは女性にも男性と同じ役割が期待されていたために、これらの集団に身を投じた女性たちの数は少なくなかつた。女性は男性に従う弱い性でありその領域は家庭という考えが支配的であった時代に、このような生き方を選択した女性たちは、自分自身に忠実に生きた稀有な精神力の持ち主だったといえるだろう。

17世紀のイギリスには本稿で紹介した女性たち以外にも、様々な形で宗教

と関わり自らの生を燃焼させた女性たちがいた。彼女たちの研究を通して時代のありように新しい光を当て、新たな物語を生み出していくことが今後とも必要だと思われる。

本稿は「2005年度実践女子大学国内研修の研修成果報告」として2006年5月に実践女子大学学長に提出したものである。また2章は『英語青年』2000年3月号に「内乱期の apocalyptic writing とジェンダー」として発表した論文を一部変更し、引用部分を削除したものである。なお本稿は読みやすさを目指したため、あえて注を記さず参考文献を付けるに止めた。

#### 参考文献

- Baar, Mirjam de, et al. *Choosing the Better Part: Anna Maria van Schurman (1607-1678)*. Dordrecht: London: Kluwer Academic Publishers, 1996.
- Bostick, Curtis. *The Antichrist and the Lollards: Apocalypticism in Late Medieval and Reformation England*. Leiden: Köln: Brill, 1998.
- Brown, Elisabeth Potts and Susan Mosher Stuard, eds. *Witnesses for Change: Quaker Women over Three Centuries*. New Brunswick: Rutgers University Press, 1989.
- Crawford, Patricia. *Women and Religion in England: 1500-1720*. London: Routledge, 1993.
- Dhedgzooy, Kate, Melanie Hansen and Suzanne Trill, eds. *Voicing Women: Gender and Sexuality in Early Modern Writing*. Pittsburgh: Duquesne University Press, 1997.
- Gillespie, Katharine. "A Hammer in Her Hand: The Separation of Church from State and the Early Feminist Writings of Katherine Chidley." *Tulsa Studies in Women's Literature* 17 (1998): 213-33.
- \_\_\_\_\_. *Domesticity and Dissent in the Seventeenth Century: English Women's Writing and the Public Sphere*. Cambridge: Cambridge University Press, 2004.
- Hinds, Hilary. *God's Englishwomen: Seventeenth-Century Radical Sectarian Writing and Feminist Criticism*. Manchester: Manchester University Press, 1996.
- \_\_\_\_\_. "Anna Trapnel, *Anna Trapnel's Report and Plea*." Ed. Anita Pacheco. *A Companion to Early Modern Women's Writing*, 177-88. Oxford: Blackwell Publishers Ltd., 2002.
- Hobby, Elaine. *Virtue of Necessity: English Women's Writing 1649-88*. Ann Arbor: The University of Michigan Press, 1989.
- Lindley, Keith, ed. *The English Civil War and Revolution: A Sourcebook*. New York: Routledge, 1998.
- Longfellow, Erica. *Women and Religious Writing in Early Modern England*. Cambridge: Cambridge University Press, 2004.
- Mack, Phyllis. *Visionary Women: Ecstatic Prophecy in Seventeenth-Century England*. Berkeley: University of California Press, 1992.

- Marshall, Sherrin, ed. *Women in Reformation and Counter-Reformation in Europe: Private and Public World*. Bloomington: Indiana University Press, 1989.
- Merian, Maria Sibylla. *New Book of Flowers*. Munich: Prestel, 1999.
- Otten, Charlotte F., ed. *English Women's Voices, 1540-1700*. Miami: Florida International University Press, 1992.
- Popkin, Richard H. *Millenarianism and Messianism in English Literature and Thought 1650-1800*. Leiden: Kobenhavn; Köln: E. J. Brill, 1988.
- Purkiss, Diane. "Producing the Voice, Consuming the Body: Women Prophets of the Seventeenth Century." Ed. Isobel Grundy and Susan Wiseman. *Women, Writing History 1640-1740*, 139-58. Athens: The University of Georgia Press, 1992.
- Saxby, T. J. *The Quest for the New Jerusalem, Jean de Labadie and the Labadists, 1610-1744*. Dordrecht: Martinus Nijhoff Publishers, 1987.
- Van Schurman, Anna Maria. *Whether A Christian Woman Should be Educated and Other Writings from her Intellectual Circle*. Ed. Joyce L. Irwin. Chicago: The University of Chicago Press, 1998.
- Wettengl, Kurt ed. *Maria Sibylla Merian, 1647-1717, Artist and Naturalist*. Ostfildern: Verlag Gerd Hatje, 1998.
- D. クリステイ＝マレイ、野村美紀子訳『異端の歴史』、教文館、1997。
- 浜林正夫『イギリス宗教史』、大月書店、1998。
- 岩井淳『千年王国を夢みた革命 17世紀英米のピューリタン』、講談社、1995。
- 小嶋潤『イギリス教会史』、刀水書房、1995。
- 小柳康子「内乱期の apocalyptic writing とジェンダー」、『英語青年』(3月号、2000)：23-5。
- 「バトスーア・メイキンと十七世紀の女子教育論」、青山誠子編『女性・ことば・ドラマ 英米文学からのアプローチ』、彩流社、2000、63-72。
- 「17世紀の女性哲学者 Anne Conway——心身一元論の世界」、『実践英文学』(第57号、2005)：93-107。
- 中野京子『情熱の女流「昆虫画家」メーリアン 波乱万丈の生涯』、講談社、2002。
- ナタリー・Z・デーヴィス、長谷川まゆ帆ほか訳『境界を生きた女たち』、平凡社、2001。
- ノーマン・コーン、江河徹訳『千年王国の追及』、紀伊國屋書店、1993。
- P. デインツェルバッハー、植田兼義訳『神秘主義事典』、教文館、2000。
- ロンダ・シーピンガー、小川真理子ほか訳『科学史から消された女性たち アカデミー下の知と創造性』、工作舎、1992。
- 、小川真理子・財部香枝訳『女性を弄ぶ博物学 リンネはなぜ乳房にこだわったのか?』、工作舎、1996。
- 田村秀夫編著『イギリス革命と千年王国』、同文館、1990。
- 『千年王国論 イギリス革命思想の源流』、研究社出版、2000。